ルポルタージュ

ヒロシマ一九六八年の夏

伊藤　信夫

□「原爆ドーム」の絵

高熱で血と肉が焼ついた瓦の破片、アルコール漬けになったケロイドの肉塊‥‥。私は原爆資料館を、なんとも救われようのない気持で後にした。

はがれた皮膚の中から骨が露出していた少年、焼ただれて顔の皮膚がウロコのようにさかだっている女学生、その少女の目と歯だけが、異様に白く光っていた。瓦礫と砂ぼこりのなかを、体じゅうにガラスの破片をつきさし、血膿を吹き出しながら逃げまどう婦人の姿‥‥。

いくらかき消そうとしても、陳列されていた写真が目に浮かんでくる。

広島駅から平和公園のある相生橋まで、市電の窓から見た広島市は、完全な近代都市であった。原爆の悲惨さを伝えてくれるだろうと期待していた原爆ドームも、保存運動のおかげで強固に補修され、周囲には柵が築かれて、とても過去のヒロシマの証人といえる代物ではなかった。同行者の立命館大学の脇田君も、広島に帰ってくる度に、次々と新しい記念碑が立っているのには驚ろいていた。

平和公園の折り鶴の塔も、原爆慰霊碑も、〈広島の人々の生活の中に、原爆はどのような影を宿して生きているだろうか〉という私の問かけに対して、むなしく無言の回答をかえした。しかし、《安らかに眠って下さい、過ちは繰り返しませぬから》と刻まれた、慰霊碑の銘文は、さすがに印象深かった。

原爆資料館の室内に再現されている八月六日の世界と、現在の広島の街並みとは、あまりにも深い断層がありすぎた。まして私のように戦争を知らない世代にとっては、目の前に告発されている事実でさえも、想像に絶するものであった。

焼ついてしまいそうな太陽、その光をまばゆいばかりに映ている原爆ドーム――八月六日を描いた絵は、ほとんどが暗い幽霊の町ヒロシマか、地獄の様相であり、ドームはその象徴であった。だが、この絵は違っていた。

平和記念公園で催されていた『第十四回・広島市平和美術展』のなかで、私はこのめずらしい「原爆ドーム」の絵を見た。

赤・黄・青のおもいきり明るい原色を使って、真夏のドームを描いている。まるで、ドームの下で焼け死んでいった人々を投影しているかのようであった。

作者の名前の上には、黒いリボンで喪章が結ばれており、一枚の追悼文が貼りつけられていた。

愛の讃歌

暗闇の中で、長い時をすごしたものたちが、夜明けに向けて、どんな表情をみせるだろうか。ある日の未明、私は産業奨励館の廃墟にたたずんでいた。原爆ドームの　焼けただれた壁は、怨念の目を私に向けた。

この廃墟で　百数十人の　にんげんが溶けた。夏草はすでに生の匂いを放つ。廃墟の朝は　円頂の錆びた鉄骨が告げる。瓦礫とともに　溶けた人の骨が　私のゆびさきで　もろくもくずれてゆく。

あなたの　うらわかいいのちは　やはり　人間が　人間の頭上に　あびせた　原爆に囚えられたのだろうか。未解放部落に　被爆二世として生れた　あなたの　どこにも　そんな影はなかった。

だが　ある日　突然に　あなたは　ヒロシマの土に還っていった。

〈愛は美しく　その力はすばらしい
　愛のすべてを
　ゆだねることができたら‥‥でも不安なのだ
　愛が黒く冷たいくさりにからまれて
　しだい　しだいに　冷たくなっていきは、しないだろうか〉

あなたの詩の一節とともに　どうしようもない怒りがこみあげてくる。

あなたを殺したのは　だれだ。

深　川　宗　俊

神　崎　敏　記　君

《故神崎敏記　広島市福島町九〇～二金崎是方》プログラムの出品者住所録には、こう書かれていた。

福島町――原爆でさえも破壊することのできなかった、広島一大きい部落。この福島町で被爆二世として生れ、育った神崎敏記君。まだ見たことのない、いやもう永遠に会うことができなくなってしまったこの青年のことが、妙に私の心をとらえてはなさなかった。

部落に生れ、被爆二世として差別されて育ったこの青年が、どのように生き、どのようにものを考えただろうか……。二重、三重の苦しみを背負って生きてきた青年にしては、この絵はあまりにも明るすぎる。そんな影が微塵も見られない。

とめどもなく疑問が、次々にわいてくる。今はもう会うことはできないが、彼の両親や友人に会って、話しを聞くことはできる。彼の詩を読んで、彼の考えていたことを知ることはできる。

〈福島町へ行ってみよう。神崎君が生きた町、福島へ行ってみよう〉私は心のなかで、こう固く決心していた。

一階の神崎君の絵の向いに、四国五郎さんという人の「母子像」の絵が飾られていた。

長い年輪と修練のあとを感じさせる絵である。暖かい母親のひざの上にすわっている坊やの表情が、豊かに描き出されている。
この「母子像」とは正反対の母と子の絵が、三階にあった。炎の中にしっかりと抱きあっている母と子の絵である。
平和な時代の母と子、灼熱の原爆の炎に包まれた母と子。この二枚の「母子像」と神崎君の「原爆ドーム」の絵は、いつまでも心にのこった。

平和記念公園を出る頃には、太陽が西の空に沈み、まっ赤な夕焼けが、深い緑の平和公園をつつんでいた。

□原点の炎

「昭和二十年十二月、アメリカの占領軍が広島にやって来た時…。」
蒸し暑い第三分科会――『被爆体験と原水禁運動』の会場に深川さんの声が響いてくる。

八月六日
あの閃光が忘れえようか
瞬時に街灯の三万は消え
圧しつぶされた暗闇の底で
五万の悲鳴は絶え
・・・・・・

峠三吉の『原爆詩集』の朗読によって、静まりかえった場内にむかって、戦後の被爆者、文学者、医者たちのたたかいを、一言々々力強く深川さんは訴える。
原民喜、大田洋子らの文学者が、昭和二十年九月の占領軍によるプレスコードとたたかい、どのような苦しい状態のなかで作品を書きつゞけたか。被爆直後、広島にかけつけた医者たちの大半が原爆病で死に、彼らが生命をかけて調べた記録は、アメリカに没収され、今なお帰されていないという事実。しかし、占領軍がどんなに激しい弾圧を加えても、広島の人々は、原爆の恐ろしさ語ることをやめなかった。
暑さと疲労にまいりながらも、出席者たちは熱心に耳をそばだてて聞き、鉛筆を走らせている。
「芸術は人間のためにある。人間の世界が危機にさらされるとき、人間がこころにもつ最も美しきものの結晶である芸術は、直ちに人間の敵にたいする最も鋭利なる武器となってかざされねばならぬ。」
朝鮮戦争の最中、占領下の広島において、かくも格調たかい反戦平和の宣言が、なされていた。峠三吉は、伏字を使って詩集を発刊し、たたかいの詩を書きつづけていた。八月六日の平和式典を中止させ、新聞を発刊停止にしたアメリカ軍も、平和を切望する広島の人々の叫びを消すことはできなかった。
「たたかいの炎こそわが原点だ。」と報告は結ばれた。

叙事詩『ヒロシマ』を書こうとして、書けずに死んでいった峠三吉。その志をついでいる広島の詩人たち。誰からも援助の手をさしのべられなかった被爆者たちを組織していった吉川勇。その後につゞく被爆者たち。

彼らの生命をすりへらしていった、死とむかいあわせのたたかいの炎にこそ、われわれの原水爆禁止運動の原点がある。この成果は、何人たりとも否定できない。原水禁運動を市民運動に解消しようとする人々への、力強い反論である。

午後からの各地方の代表発言は、分科会の性格もあるのだろうが、ほとんどが統一への努力を語り、方向を思索するものであった。雨の日も、風の日も六・九カンパに立ちつゞけた東京練馬の失対に働くおばさんたち、処分を覚悟で日本原水協の大会に参加した青年労働者、彼らの発言は、真剣な気迫にみなぎっていた。

昭和二十年八月六日の影と戦後二十三年の光がクロスする日。この日のヒロシマは、原爆都市の色彩を、ますます濃くする。

マスコミは、被爆者たちが原水禁運動に参加しないで離れていくのは、さも三つの大会に分裂している不幸が、その原因のように書きたてるが、この報道がどんなに一面的で、誤ったものであるかを、私は今度の広島旅行で知った。

被爆者たちが、心の底から怒りを感じているのは、原爆を売りものにし、観光行事化されることに対してである。今年の平和式典では、市長が読んだ平和宣言と、参拝者に手渡されていた宣言文が違っていて、大騒ぎになるという茶番が演じられた。その原因は、市長自らが宣言文を考えずに、他の者にまかせておいて、提出された三つの案を適当につなぎあわせたところ、部下の手違いから三種類別々に印刷されたことにある。

両親を、きょうだいを、恋人を原爆によって奪われ、自身も被爆した人々が、この事実をどう受けとめただろうか。彼らの心を、どんなに深く傷つけたことだろう。どの新聞、テレビ、ラジオでも、このことは報道されなかった。

広島の人々の怒りが、だれにむかって放たれているのか。なぜ、こんなにも明白な事実が、報道されないのだろうか。腹の底から怒りがわいている。

〈何が書かれていたか、何が報道されていたかを見るのではなく。何が報道されなかったか、何が書かれていなかったを知らなければならない。〉

報道されない真実――広島には、あまりにも多くころがっている。

平和行進、第十四回世界大会を経て、宿舎である廿日市の脇田君の家に帰った私は、心よい充足感にしたっていた。

相生橋から見た、燈ながしの青い火、赤い火、黄色い火の光が、点々とまぶたにやきついている。

〈明日は福島町へ‥‥。〉心のかたすみで気にかかっていた、神崎君のお母さんに会うことができる。福島町と神崎君について、いろいろな想像をめぐらせながら、私は床につい

た。

一九六八年一月二八日の午前四時二〇分、美しい朝焼けにてらされて、一人の青年が死んでいった。二十六日の夜十時頃、風呂の中で倒れてから、長い意識不明の状態がつゞき、何も語らず、何も言わずに静かに息をひきとった。病名は「くも膜下内出血」である。

父親が結核で倒れ、長い療養生活を送っているために、いきたかった観音高校への進学を断念して三菱の工業高校に進学した。しかしそれでもまだ、部落の中では特殊な幸福の道である。彼が、工業高校に通いながら、国泰寺の定時制高校を卒業し、通信制の大学に入学できたのは、はるか恵まれていたという。

部落の青年とは、ほとんどつきあわなかったし、家の中でも母親の方から話しかけないかぎり、部落のことを話そうともしなかった彼は、一見、部落とは無縁の存在のように見られていた。だが、そんな彼も、決して何も考えていなかったわけではない。いや、むしろ考えないわけにはいかなかった、と言うほうが正しい。

彼は、通信大学のグループ機関誌に、『ドン・バカチョの回顧録』という一文をよせている。その中で、中学三年生の初恋の思い出を、こう書いている。

「黒い冷たいかたまりで私はうちのめされた‥‥部落民という言葉が私の脳裏に焼付いたのはこの時だっただろうか‥‥いやそうじゃない。ずっと前からこの事に気付いていたような気がする‥‥

○

卒業してから、私はそれ以上あの人に近づかなかった。こわかったのだ。それ以上近づけば、あの人を、深い悩みの中にまき込んでしまいそうな気がした。‥‥」

普通だれしも初恋は、甘い感傷の思い出である。だが、部落の青年にとって初恋は、重く閉ざされた差別の壁を知る第一歩となる。人を愛し、好きになるという人間として当然の権利、それさえも部落の青年は奪われている。どんな青年も、この厚い壁のもつ冷たい現実を知らずには、生きていけない。

仏前にあった神崎君の写真からは、そんな苦しみの影を感じることはできなかった。山登りと、詩と、絵が好きだったそうだが、そんな気のする笑顔のやさしい好青年だった。

「自分の絵を見て、『おれも美大へ行けていたらなァ』と一人つぶやいているのを聞いた時、私は胸がしめつけられる思いがしました。親の私が言うのも変ですが、本当にあの子は立派でした。立派すぎて、無理を言ってくれなかったのが、今から思えば不びんでなりません。‥‥」

母親の神崎イチ子さんも、二十三才の時、やはりこの福島町で被爆した。毎年、夏になると激しい疲労が襲ってくるそうである。

神崎さんの声は、次第に涙ぐんでいる。

「なぜ、私たちは部落民といって差別され、その上また被爆者としていわれもなく差別されるのでしょうか。私たちが、どんな悪いことをしたというのです。」

誰に言うともなく、むしろ強く自分に言いきかせるように語ってくれた。
病気の夫と三人の子供をかかえての彼女の戦後の生活は、どんなに苦しかっただろうか。
「でも、この子らが、差別に負けないで、まっすぐに生きてきてくれたことが、私の唯一のよろこびです。」
差別に負けなかった子供たち。母親にとって、これほど誇らしいことはない、と神崎さんはよろこぶ。
神崎君の弟さんは、三菱工業高校に入学して、全く兄さんと同じコースを歩んでいる。しかし彼は、地域の部落解放同盟青年部に入ったという。きっと兄さんの死をのりこえて、大きく前進していくことだろう。

すっかり話しこんでしまって、長い時を過した私は、神崎さんの一家のことを考えながら解放同盟へと急いだ。
昼間、神崎さんの家へ行く前に会った、『どんぐり子供会』を指導している解放同盟青年部長の八木君の言葉が、頭にうかんでくる。
「被爆二世であることを知られるのは、やっぱり嫌ですね。部落だといって差別され、学力がないといって差別され、生活保護を受けているといって差別され、その上、被爆二世じゃ、いたたまれませんよ。‥‥」
確かにそのとおりである。しかし、はたしてそれでいいのだろうか。
人生のうちで最も未来への大きな希望にもえ、無限の可能性を信じる青年期に、死を直視し、死と背なかあわせに生きている現実を知らなければならないというのは、あまりに残酷すぎる。それこそ、彼らに何の罪があるというのか。だが、原爆のもつ底しれぬ恐ろしさを、自分の体に刻まれた若い世代がたちあがらなくして、だれがあの原水禁運動の原点の炎をうけつぐことができるのだろうか。彼ら被爆二世の青年こそが、これからの運動の新しい旗手とならなければならない。
神崎君の突然の死を思い返した時、激しい憤りが生まれてくる。
神崎さん一家の母と子の姿に、不当な差別とたたかってい生きる力強い「母子像」を、私は見た。

□鉄道草の歌

福島町は広島の西部にあり、北東部は太田川放水路、北西部は福島川、廃川敷に隣接しており、人口は約七千人といわれている。面積は三三九・六〇九・四四平方米であるが、広島市一人当りの面積が約五九・二坪であるのに対して、福島町では二一・七坪である。この数字を見ただけでも、この町の家屋が、どれだけ密集して建てられているかが分る。
市電福島町の停留場は、地図で弓月形になっている街の中心にある。その停留場の向い側に、福島病院がある。京都の交通量の激しい狭い道路を見なれていた私には、道巾の広さと交通量の少なさに奇妙な感情をいだいた。それにもまして、改良住宅のすぐ横に、今

にもこわれてしまいそうなバラックを見て、完璧に舗装された道路との間に、極端な不調和を感じた。

福島病院で、原爆患者の医療相談をしている鏑木さんは、部落の被爆者の生活と福島病院の活動について語ってくれた。

現在福島町の人口の六十パーセント以上は被爆者で、被爆二世・三世をいれれば、その数はわからないそうである。

精神病、アル中、ヒロポン中毒の患者は減ってきたといっても、部落外と比較すると、その数は多い。近頃では、エフェドリンという劇薬を要求する患者がでてきたので、医療関係の労働者でもよく知らないこの薬が、なぜ要求されるのかを調べてみると、ヒロポン代わりに使われていたそうである。

おしひしがれた人々が、現実の差別と原爆病から逃避する最も安易な方法は、酒にひたるか、薬をうつか、賭に熱中するかである。こうして、差別と貧乏との追いかけっこは、かぎりなくくり返され、最後には、その人の骨まで腐らせていくのである。貧困と病気は、切っても切れない関係にある。まして、この福島病院では、原爆病と真正面から取り組まなければならない。それにしては、あまりにも医者の数が少ないことが、この病院の最大の悩みである。

しかし、医者の不足で苦しみながらも、部落の人々とは人間的な絆で結ばれている。たとえば、医院長の田阪先生が診察する日には、外来患者が列をなしてならび、廊下にあふれるという。とても一人々々親切な診断ができなくとも、患者はたゞ、先生に脈をとってもらうだけでもよろこび、安心して帰るという。

人によっては、この患者たちを無知だと笑うかもしれない。しかし、彼らは真剣である。生きることに真剣だからこそ、信頼できる医者を、自分で選ぶのである。この人たちを笑うことは、だれにもできない。

「被爆者たちが、まず組織されねばいけませんよ。」

福島県生まれだという彼は、とつとつとした東北弁で、確信をもって言った。話しかたにも、素朴で堅実な人柄がにじみでている。

話しは、被爆者の組織と治療方法に移っていった。

被爆者の会については、「被爆者の会の責任者を紹介すましょう。私なんかの話しを聞くよりも、はるかにその方がよく分かりますよ。」

鏑木さんは先に立って、福島病院を出た。

真夏の太陽の下で、部落の青年が病院に来て、ピンポンをやっている。生活相談室の方から、明るい笑い声が聞こえてくる。病院の白いコンクリートの建物が、まばゆくはえている。

部落の通りの一つに、『〇〇君の甲子園出場を祝す』と書いたのぼりが上っていた。

「エービースースーがもっている資料を公開すれば、原爆死亡者の数は、確実に減少す

ますよ。」
　怒りをこめて、彼はつぶやいた。

　「部落は健康的とはいえないまでも、文化的でしたよ。どこが部落なのか、人に聞くまでは、僕にはさっぱりわかりませんでしたねえ。」
　比治山のＡＢＣＣ（原爆障害調査委員会）からの帰り道、一緒になった神戸大学新聞社の学生の言葉が、思い出された。
　改良住宅、隣保館などを見て歩いていると、たしかに表面は整備されている。しかし、この青年は、トタン板をはりめぐらした朝鮮部落を見たのだろうか。部落の人の生活に一歩でも足を踏みこもうとしたのだろうか。行きずりの旅行者の目でしか、部落を見ていなかったと思う。

　比治山の頂上に立って、広島全市を見下しているＡＢＣＣは、美しい銀色の翼を空いっぱいに広げている、ジェット戦闘機を思わせた。豪華な機械設備と近代的な施設は、ますますこの印象を深くした。
　案内してくれる日本婦人の馬鹿丁寧さは、近よりがたい溝とあまりにも人工的な粉飾を感じる。この建物のどこかに暖かい人の心を通さないなにかがある。
　きれいに整理された二千枚の定期診断の患者カルテを見た時、私はいたたまれぬ気持ちになった。
　原爆投下直後、生命をとして調査した医者たちの資料を没収し、占領下で良心的な医者、病理学者を大学から追放して、プレスコードをしいた彼らは、その資料を、そして戦後の調査活動の結果を、今もって公開しようとはしない。そればかりか、現在でもなおかつ、医者や病理学者たちの原爆に関する発言には、厳格な憲兵としての役割を果し、少しでも被爆者の苦しみの原因を原爆から遠のけようと、やっきになっている。
　広島では、いろいろ驚ろいた事実に直面するが、これもその一つである。
　本来、日本の人口流動が外国に知れるのは、機密漏えいの罪にとわれるはずであるのに、原爆患者が死ぬと、火葬する前に必ずといってもよいぐらいＡＢＣＣの車が来て、死体の解剖を要請するそうである。――
　みせかけだけの日米親善、被爆者たちへの同情、その裏にあるものが、あまりにもはっきり見えすぎている。
　あの二千枚のカルテも、冷酷な観察者たちの二千匹のモルモット標本カードである。

　「街はたしかに復興されました。しかし人間の復興はどうなったでしょうか。広島が再建されたとき、一番なおざりにされたのが人間の問題です。そのなかでも、最後までおいてきぼりをくらったのが、この福島町です。」
　福島地区被爆者の会の会長であり、また神崎君の伯父さんでもある金崎さんは、戦後の

福島町の歩みを語ってくれた。
　私が福島町に来た時、改良住宅の整理が、意外なほどいきとゞいてるのに驚ろいた理由が、はじめて分った。
　この福島町は、昭和二十一年の戦災復興計画、昭和二十七年の広島平和都市計画によっても、とりのこされた街であった。行政が差別をつくりだしているのである。
　昭和三十五年の四月十五日、都市改造区画法が制定されるまでの十五年間に、いったいどれだけ多くの人々が死んでいったことだろう。
　差別され、さげすまれ、それでも雑草のように生きてきた人たち、彼らは、原爆にまで差別されていたのだ。
　福島町は、爆心地から二キロほど離れた所にある。しかし、福島町の被爆者たちの放射能の量は、一・五キロで被爆した人より多いのである。部落の人家の三分の一は倒壊し、三分の一は消失しても、部落の人々は、他の土地へ疎開することはできなかった。広島近郊の農村に非難しても、福島町の者だということがわかると、食料は分けてもらえない、寝る所はかしてもらえないと、むごいしうちがまちうけていた。
　彼らは弱い者どうしがお互いに肩をよせあって、たくましく生きぬこうとした。しかし、そのために、黒い雨、第二次放射能の洗礼を、まともにうけなければならなかった。
　だが、原爆にまで差別され、行政には裏切られつゞけていた彼らも、いつまでの石のように黙ってばかりいなかった。
　池田内閣による失対打切り政策――人殺しの政治に対して、失対で働くおばちゃんたちの怒りが、燃えひろがっていった。五〇代、六〇代の主婦たちが、仕事で疲れた足をひきづり、一軒々々なかまの家をまわって歩き、失対で働く者どうし、同じ被爆の苦しみをもつものどうしが、語りあう場をつくっていった。それが、福島地区の被爆者の会のはじまりである。
　アカ攻撃、町内のボス連中のいやがらせにも負けないで、会の輪は拡がっていった。五、六人ではじめた会も、一カ月後には三十六人になり、今では四百人から組織している。
　この会も、太田川の斗争で、政治的な自覚も強めていった。失対に働くおじちゃん、おばちゃんたちが、二年と七カ月にわたり、いれかわりたちかわりして工事現場のレールの上に座りこみ、自分たちの要求が通るまでは、一軒たりとも立退かないと、市を相手どって斗かい、勝利をおさめた。
　この斗いが福島町を変え、福島町の人々を変えていった。団結すること、たたかうことを学んだ人々は、はじめて自分の体で〈権利〉という言葉の意味を知った。
　福島町の改良住宅、隣保館は、こうした中から生まれていった。
　死の宣告を受けてからはじめて入院治療が受けられる現代の医療制度、被爆二世の苦しみ‥‥。話しは、かぎりなくつゞく。
　最後に金崎さんは、一人の婦人のことを話してくれた――
　その婦人の名前は、木村ミツエさんで、やはり原爆によって夫や子供を失った被爆者で

あった。彼女は被爆した時に背骨を折り、それ以後、仕事をすると腰が痛みだした。その痛みを忘れるために酒を飲むようになり、だんだん度をすごすようになってきた。酒を飲むと行動も粗暴になるので、友人や近所からも疎外されるようになった。そして、孤独に耐えられなくて、ますます酒を飲む‥‥、その後は、お定まりの悪循環である。

その彼女に、金崎さんが六・九被爆者救援のカンパをとどけたところ、彼女はこう言った。

「あんたたちは、ＡＢＣＣのことを悪ういいなさるが、私にとっては救いの神です。毛布はくれるし、酒や果物はくれるし、あげいに有難いところはありません。」

この婦人は、最近、酒に酔って風呂に入り、心臓麻ひをおこして死体となって浮いていたという。――

金崎さんは、この婦人の死を知らされた時、ふと、あの婦人が云っていた〈ＡＢＣＣが私に、こんな親切をしてくれとるのも、私が死んだら死体の解剖をしてよい約束をしとるからじゃのう〉という寂しそうな言葉を思い出した。

自分から夫を奪い、子供を奪い、自分をこんな苦しい生活にたたきおとした者たちに、一枚の毛布、一箱の果実欲しさに尾をふる、これほどの悲劇があるだろうか。いたましい人間の破壊であり、民族の悲劇である。

「実は、私の娘も五歳の時に、胎内被爆というめずらしいケースだったので、ＡＢＣＣに学校からの帰り道、誘いだされたことがあるのです。もちろん、日本の警察ではとりあつかってくれませんでしたよ。」

広島駅のプラット・ホームで汽車を待っていた私は、線路ぞいに生え繁っている鉄道草に目をうばわれていた。

〈七十五年間草木も生えぬ〉といわれていた広島の焼け土に、人骨を肥料として、どんどん生え繁っていった鉄道草。それにもまけないで、バラックをつくっていった人間たち。この豊かな生命力は、今日、人間の価値を低めようとしている時代に、どれだけ高く評価しても、しすぎるということはないだろう。

広島の被爆者たちは、暗い過去から解放されて、明日を信じて生きるには、あまりにも裏切られすぎていた。しかし、それに圧しつぶされないで生きている人たちのいることを知って、私は何か、人間を信じることができる確信を得たような気がする。

ヒロシマという街が、人類の最後の審判を予知した都市であるなら、私はその試練にうちかった人間の力を信じる。人類の未来を啓示するのは神ではなく、人間である。そして〈過ちは繰返しませぬ〉ではなくて、〈過ちは繰返させませぬ〉である。

広島で会った人たちの顔が、一人一人頭のなかに浮かんでくる。この人たちが、きっと広島の平和への炎を、たたかいの芽を育てていってくれるだろう。

〔附記　広島在住中、いろいろお世話になった方々に感謝します〕

一九六八年八月二十八日夜